



保健婦や看護婦による心のケアや健康相談の巡回

地震における行動 （日野町役場総務課 池田俊弘）

まさか日野町にこんな地震が来るとは想像だにしませんでした。発生直後、通りかかった蕨津橋付近では、落石と土砂くずれにより国道が不通になっておりました。くずれた土砂に一台の車が半分埋まっていました。その運転手さんの無事を確認したあと、ようやく役場に到着したのは午後3時ごろでした。役場では、「家が倒れかかっている何とかしてほしい」「裏山がくずれかかっている」など緊急を要する電話がひっきりなしにかかってきました。すぐに対応できず、「危険を感じたらすぐ避難してください」と言うのが精一杯の状況でした。

対策本部で私は、自衛隊や県との連絡調整や、ブルーシートの調達とヘリコプターの依頼などさまざまな業務に追われました。とりわけマスコミの対応には苦慮しました。ただでさえパニック状態のなか、次から次へとテレビ局や新聞記者が来て同じ質問を繰り返すのです。あるとき、せっかく屋根に張ったシートが、低空取材するヘリコプターの風圧のためはがれ飛んでいるとの情報が入ったときには、いくら報道の自由とはいえ、相手の、しかも被災者の立場を考えた取材をすべきだと怒りを禁じ得ませんでした。

職員は二日間ほとんど徹夜でしたので、皆疲れ、気が高ぶっており、口論することもありました。いま振り返ってみると仕方ない状況だったと思います。

久しぶりに自宅に帰ったのは10日の朝まだ明けぬ2時頃でした。迂回路の広域農道を運転しながら、途中何度か路肩に突っ込みそうになりました。家までがやけに遠く感じたことを覚えています。

この震災で、「まず自分の身は自分で守る」という自主防災意識の大切さを痛感しました。普段から近隣で助け合うという気持がいま再び必要ではないでしょうか。

支えあう大切さを学んだ (民生児童委員 佐々木高子 舟場)

昨年10月の鳥取県西部地震から1年が経とうとしております。何世代もの人たちが一生懸命に築きあげてきたものがいかに脆いものかということ、阪神淡路大地震ともあわせて思い知らされました。また、人間が生活を営むうえで、基本は家でありファミリーであり、それがいかに大切かということも、あらためて学ばされました。住宅支援制度、地震災害復興対策事業が、県及び町行政により、それも早い段階で実現されましたことは、町人口の流失を最小限に防げたことと、復興に向けての起爆剤になったのでは、と思います。しかし、このように復興のために設けられたいろいろな補助、支援制度が、該当者、とくに高齢の独居やご夫婦世帯の方々に漏れなく公平に利用されていたのか、また、次々に出される情報が正しく伝わっていたのかどうかという心配があります。お年寄りも、自分で頑張らなくてはという思いが強く、ボランティアセンターにお願いされればやっていただけたのに、無理をしてしまって医療のお世話になったということも聞きました。屋根のシートをかけていただいて本当に助かったという声や、「自分は高齢だけれども、お世話になるばかりでは心苦しいので、何かちょっとしたお手伝いでも」という申し出もありました。高齢者同士がお互いに助け合い支えあうことのできることを知り、この方々に拍手を送りたいほどうれしく思いました。このような状況のなかで、私の立場としては、行政から出されているいろいろな情報を確実にお伝えすること、困っておられることをよく把握することなど、行政の手の届かないところに気配りすることが私たちの活動ではないかと、自分なりに感じたことでした。

私たちは、この突然の災害により、精神的にも経済的にもたいへんな被害にあいましたが、反面、お互いが助け合い支えあうことの大切さを身をもって学ぶことができました。今後、町民ひとり一人がこの貴重な体験を糧に、これからの日野町のまちづくりのビジョンである、『愛と元気なまちづくり』につなげてまいりましょう

商工業者の被害状況 (日野町商工会経営指導員 藤原洋一)

平成12年10月6日、この日は日野町商店街活性化先進事業のチャレンジショップ『出雲街道根雨宿一番館』の開店日であり、わたしたち役職員一同、朝からその準備に追われている最中、いままで体験したことのない自然災害に見舞われたのでした。

日野町商工会としては、ただちに商工業者の被害状況の把握と被害写真の撮影を開始しました。当初、108の事業所から263件、9億6871万円（建物関係101件・4億441万円、敷地駐車場関係14件・2440万円、機械装置関係15件・1億8330万円、器具備品関係33件・1996万円、商品関係41件・4479万円、売上等その他の被害59件・2億9185万円）の被害結果が出ました。

片山鳥取県知事により鳥取県西部地震対策特別資金が創設され、私たちは、そのPRと融資斡旋に明け暮れる日々が始まりました。

平成12年度の斡旋総件数60件、3億6865万7千円（設備資金42件・1億2140万6千円、運転資金44件・2億4725万1千円）。その間、実際の被害も拡大し、被害件数117件・12億4977万円に達しました。

13年9月現在でも、同資金の斡旋を手がけているが、最終的には67件、5億382万4千円（設備資金49件・2億5657万3千円、運転資金44件・2億4725万1千円）に拡大しそうです。しかし、町内事業者の大半は地震の影響による売上高の減少によって資金繰りなどに苦慮していることは

言うまでもありません。

地震被害はまだまだ拡大しています。地震の後遺症が早く癒えることを願うものです。

大震災を顧みて (下榎 八谷佐千子)

平和な日野町に思いがけない大震災が発生しました。この世の地獄を思わせるような地震でした。震源地に近い山寺の老いの夫婦をお守りいただいた御仏様に有り難い感謝の気持ちでいっぱいでございます。この頃の気持ちを俳句と短歌にあらわしました。

- ・秋寒し 地震の傷の 深さかな
- ・震災の つめあとと深く 冬迎う
- ・震災の 後追ひかけて 冬来る
- ・義援金 貰う身となる 師走かな
- ・激震に 堪えて不動の ご本尊
老いの夫婦を 守りたまえる
- ・戦災も うけず 過ごして来たる今
老いて身にしむ 地震のすごさ
- ・震災で 倒れし墓を たてなおし
僧侶の読経 山にこだます
- ・石灯籠 倒れしままの 境内に
春は巡りて 桜花爛漫
- ・外観は あまり見えざる 震災の
傷の深さは 中にひそめり
- ・平和なる 秋の最中の 大地震
- ・雨もりを 防ぐテントに 秋時雨
- ・ご先祖の 倒れし墓に 雪の舞う
- ・地蔵尊 大震災に おけがなく
延命の水 守りくださる
- ・半壊と いわれし庫裏の 中に住み
余震あるたび 心ざわめく
- ・震災の 重荷背負いて 息子等の
歩む人生 気になる余生
- ・震災で くずれかけたる 石垣に
草のびのびと 命たもてり
- ・あちこちに 新築の家 たちならぶ
皆震災の 重荷かかえて



デイサービスセンターでの避難者

相互扶助の心 (根雨 森田順子)

あの日、私は東郷町の水明荘にいました。「地震だ!」その瞬間、みんな机の下に隠れました。テレビは境港市の被害を報じ、電話は通じませんでした。急きょ日野町に帰ると、道路の陥没や土砂崩れがひどく、まるで悪夢のようでした。留守番をしていた母は、ご近所の方のお世話で広場に避難していました。その広場では、ボリュームを上げた郵便局のラジオが地震のニュースを刻々と伝えていました。突き上げてくる余震のなか、「公民館が避難所になった。家の片付けが終わったら出勤を」との電話連絡。散乱した部屋を片付け、2日目にはお墓や寺の開山堂、友人宅に行きました。目の前に広がる被害の大きさにあ然としました。あのすさまじい光景が今でもフラッシュバックしてきます。もとに戻るまで何年かかるのか、何もできないというジレンマと悲しみでいっぱいでした。

公民館は2週間、被災者のための避難所、ボランティアの宿泊場所になりました。プライバシーのない不自由な生活のなか、皆さん力を合わせてよく頑張られたと思います。館内では「こんなときだからこそきれいに」を合い言葉に、ごみの分別と掃除に協力をいただきました。あの非常時に水洗トイレが正常に使えたことは不幸中の幸いでした。神戸からのボランティアさんが公民館に入ってくるなり、「ここが被災地? 避難場所とは思えない」とおっしゃいました。それぞれの立場を自覚し、公共施設を大切に使うてくださった利用者の皆さんのお陰だと思いました。「元気? 大丈夫?」とお互いの安否を確かめ合い、必要最小限のものさえあればいいと思ったあの日が昨日のようです。県や町、そして大勢のボランティアに助けられて今日も復興への歩みが続いています。

『ボランティアからいただいた相互扶助の心』『日頃からの近所付き合い』『備えあれば憂いなし』など、このたびの地震で大切なことを教えていただきました。

心をひとつに復興をめざして (下榎 谷口祥侍)

地震が起きたとき、私は下榎地内の工事現場で重機の運転をしていました。一瞬何が起きたか判断できませんでした。後ろを振り返ると、法面が崩壊しているように見えました。死を覚悟しました。なんとか重機の転倒はまぬがれたので、すぐに飛び降り高台に駆け上がって見ると、地区の空が茶色に染まっていました。これはたいへんな事態だと、最初に思ったのが、火災が起きたらたいへんだということでした。地区内の道路を上から下まで「ガスの元栓を締めてください」と、叫びながら走っていました。倒壊している家もなく助けを求める声も聞かなかったので、ホッとして道路に座り込みました。ふと、従業員とその家族の安否を確認しなければと思い、また駆け回りました。何とか皆の無事が確認できたので自宅に帰って中をのぞいたとき、もうこの家には住めないと感じました。ガスの元栓を締め、電気のを切ってひとまず事務所に行きました。その途中、「家の下敷きになっているので助けて」と叫んでおられたので、場所と状況を聞き、会社のユニック車で駆けつけました。すでに大勢の人が救出活動をしておられて、間もなく無事助け出すことができました。そうこうしているうちに夕方になりましたが、どこの家もととても炊事ができる状況ではないことに気がつき、みんなの協力で作ってもらったおにぎりを「下榎老人憩いの家」で食べてもらいました。その頃になってようやく全住民の安否が確認できました。もっと早くに確認できるような体制づくりが必要だったと思います。ようやく皆の寝る所の確保ができたものの、明日からどうしたものかと途方に暮れていた夜中の2時頃、小谷支部長が出張先の東京から急きょ帰ってこられたので、今後の対応について相談し

ました。とりあえず独自の対策本部を設置し、住民への対応にあたらうということにしました。

一夜明けてこれから何をしたらと考えていたとき、神戸の「元気村」から、ボランティアの方が駆けつけてきてくれ、いろいろ指導いただきたいへん助かりました。それからは地区住民とボランティアの皆さんと協力して復興にあたることができました。

この震災では、住民一人ひとりが、自宅のことよりもまず、地区全体のことを考え団結して復興にあたりました。本当に素晴らしいことだと思います。このことを大事にして、これからしっかりとした防災組織を作らなくてはと考えています。

困ったことは、家が安全かどうか何を目安に帰宅の判断したらよいのか分からないことです。結局は自分の身は自分で守らなくてはならない、自分で判断するしかないのだと悟りました。もうひとつは、避難所の人数が毎日変動するので、配給される弁当の数の取りまとめに苦慮しました。

最後になりましたが、鳥取県独自の災害支援制度にとっても感謝しております。お陰でそんなに落ち込むことなく復興にあたることができました。本当にありがとうございました。

全国から駆けつけたボランティアが応援しています

(ボランティア 山下弘彦 鹿児島市)

たまたま米子駅前地震に遭い、ひと月後のニュースで「ボランティアの人手が足りない」ことを知って日野町にやってきた。11月後半には強風が吹き、屋根シートの張り直しに追われた。「雪が降る前に終えなければ」、一心に作業をしながら、おうちの人と話をするうちに、震災による痛みをひしひしと感じた。この縁で、2月から3月にかけて高齢者への聞きとりニーズ調査に深く関わることになった。そこでは、一人暮らしの方を含め、高齢者の「自分でがんばらねば」という気丈な姿に感服する一方で、「人に頼ってはいけない」気持ちが、生活を窮屈にしているという面もあるのではないかと感じた。ボランティアへの依頼は減ってきたが、震災後の片付けなど自分では手に負えないで残したまま、春を迎えようとしていた方が少なからずあった。気丈な方でも、先々への不安を抱えているところに震災の重圧がかかっている。地域でのボランティア活動として、話し相手がいることでせめて気が楽になったり、生きがいを感じられたりする機会を作っていけないか、それが町全体を元気にすることにつながるのではないかと感じている。

米子市から、鳥取市から、鳥根県大田市から。今も町外からボランティアが来て、活動は続いている。何度も日野町を訪れるうちに、ここに住む方が気がになり、「自分にできることがあれば、助けになりたい」それだけの気持ちでやってくる。年末以来、姫路市から来られる方もある。すでに足が遠のいていても、日野町はその後大丈夫だろうか、あのとき会った人は元気だろうかと心配している人が全国にいる。震災で経済的にも精神的にも大きな痛手を受けて、それは今も続いていると思う。けれども、全国から駆けつけたボランティアは、今も日野町のことを気にかけて、震災を乗り越えて、災いを福に転じるほどに元気な町になることを望んでいる。そんな多くの人たちがいることを忘れないでほしい。

立ち上がりへのトンド祭り (前黒坂上3区自治会長 牧智也)

朝起きてみると、音も立てずに雪が降っていた。昨日の夕方には、舗装道路上の雪は解けて、会場の小学校の校庭は低い方へ雪解け水が流れている。「トンドさん」の中心になる青竹も立てられ準備は完了、あとは「参加者がどれだけ……」と、心配するだけだった。

私たちの黒坂地区コミュニティー推進協議会の一部門、「人材育成部」担当の伝統行事継承事業となっている「トンドさん」の早朝（1月14日）は、深夜から約25センチの積雪。そのうえ、止み間なく降り続いていた。自宅玄関前の雪かきもそこそこに学校へ行くと、テントを張る場所は、仮設住宅におられる担当部長の梅林さんや恩田さん、1区自治会長の荒木さんに雪かきしてもらっていたらしいが、そこもみるみる積もっていった。私は準備に関わってもらった多くの皆さんに感謝しながら、雪が小降りになることと参加者の多いことを祈りつつ、あらためて雪かきをしながら開会の時刻を待った。

黒坂地区はほとんどの家屋が被害にあい、街部では解体により空き地ができてしまった。「あのしっとりとした町並みはもう見れませんかね」と残念そうに言う人が何人もあった。町のイベントがすべて中止となり、産土神社の例大祭も見送られるというような状況のときにトンドさんをしたものかどうか、という心配もあったが、逆にこのようなときだからこそ実施して、減入りがちな気持ち乗り越えて、復興第一歩への心の支えになればとの思いの方が強くあったのである。

梅林部長のご努力により、黒坂地区連合区との共催として、地区をあげて開催できることにもなった。また、ボランティア部の協力で、参加者にぜんざいをふるまうことができ、天候にこそ恵まれなかったが、参加いただいた多くの人に喜んでもらったと思う。

開催までいろいろ迷ったが、今ではやってよかったなあと心から思っている。



平成13年1月14日、黒坂小学校校庭で伝統行事「トンドさん」が開かれた

天人常に充満せり (日野病院長 堀江裕)

地震発生直後、日野病院では、20分間という短い時間に入院患者さん74名をひとり残らず中庭に運び出しました。その内10名は、夕方には17キロ離れた隣の日南病院に引き受けてもらうことができました。当時、私は岡山から12時15分発の特急やくもに乗り、新見を少し過ぎた地点のトンネルの中で、約8時間列車内に閉じ込められ、翌7日午前2時頃にようやく帰院しました。ただちに案内された根雨社会体育館の避難所は、さながら野戦病院のごときありさまであり、事のただならぬことを悟った次第です。

－病院閉鎖－発生後12時間たったの真夜中の会議のテーマは、避難している患者さんを今後どうするかでした。院内のひび割れもさることながら、屋上にある貯水槽が壊れてまったく使えない状態で、いつ復旧するか見当もつかないことから、すべての患者さんを近隣の病院に引き受けてもらうことに決めました。すでに新病院が日野川をはさんだ川向こうに完成していましたので、そのことが大きな心の支えになりました。山陰地方では1120年ぶりの大地震が、新病院引渡しが終わった直後に起こったということは、不幸中の幸いであったと思いました。翌10月7日、県内各地から応援の救急車で、西部地区内の病院に患者さんをまとめて面倒をみていただきました。患者さんの移送作業は午後2時には終わり、途方に暮れる間もなく、町の保健婦さんとともに町内9か所の避難所巡りをしました。10日からは、病院に隣接している築50年の木造の看護婦寮を使っただけの仮診療所に人員の2割を、避難所回りに3割、残りの5割の職員は新病院への引越し作業に全力をあげるという体制をとりました。

10か月が経過して、入院患者さんも例年と変わらない状態を取り戻して、普通の生活ができるありがたさを職員一同かみしめています。『衆生劫尽きて大火に焼くともこの地は安穩にして天人常に充満せり』という有り難い仏教の言葉があります。生きとし生ける物がすべて死に絶えても、春になったら新しい生命は焼け野原から生じてくるといった意味だとのこと。大きな震災を受けても、町の復興は着々と進んでいるようです。過疎に拍車がかからないよう、病院も地域の元気の出る牽引者になるべく、気を引き締めている毎日です。

新病院建設に御尽力いただいた方々、震災でお世話になりました多くの関係者各位に心から感謝申し上げます。－冷めやらぬ余震の後の引越しに職員の背中躍動す－

仮設住宅入居と牛飼い (下黒坂 梅林詢)

行政当局のご配慮をいただき、黒坂小学校校庭の仮設住宅に入居することができました。飼育している和牛(親牛2頭、子牛2頭)は、11月1日から3月29日までの5か月間、岸本町小林の大山放牧場に預けることにしましたが、牛のことにつきましては、稲わらの収納や切り込みと集荷、また、これからも継続するための和牛経営の支援策等の取り組みを、米子家畜保健衛生所の皆さんや鳥取西部農協の皆さん、大下家畜医院ご一家にたいへんお世話になりました。心から感謝しております。また、仮設住宅での生活をご支援くださいました、黒坂地区の皆さんにも厚くお礼申し上げます。

4月から手元に帰ってきた牛たちのために、仮設住宅から自宅のある下黒坂へ、約30分の道のりを毎日歩いて通いながら、牛飼いと農業にがんばっていましたが、体調をくずしたりして、なかなか思うようにはいきませんでした。最近になってようやく体調も元に戻り、明るい灯が見えてきたように思います。現在の状況を維持しながら、今後につなげていこうと思っています。

ボランティアコーディネーターの役割 (兵庫県社会福祉協議会 福島真司)

われわれ兵庫県社協関係者が到着したとき(10月11日)、すでに日野町ボランティアセンターは立ち上っていた。しかし現実には、ホワイトボードに住民の要請事項(ニーズ)と、ボランティアの氏名等を記入し、複数のスタッフが個々に調整を行っているという状態であった。日々増加する来訪ボランティアの受け入れと、住民からの支援要請のため、その調整作業はパンク寸前であった。われわれ社協のコーディネーターは、まずボランティアセンターの機能整備に着手した。「受付」「連絡調整」「総括・広報」の三つの機能に分化した。とくに「受付」については、ボランティアの受付と住民要請の受付の二つにし、それぞれ専用電話を設置した。この二つの部門に寄せられたものを連絡調整者(コーディネーター)が、個々の内容を検討しながら調整していく方法に改めた。これにより、効率的にかつ迅速に有効なボランティアの調整ができるようになり、また、住民要請の受付窓口を一本化したことにより、住民からの支援依頼も集約が容易になった。阪神・淡路大震災以来、大規模災害が発生すれば、全国からボランティアが支援に駆けつけるということは常識になっていた。しかしながら、鳥取県の中山間部に位置する高齢化率33パーセントという日野町の住民のなかには、初めてボランティアを見たという人が殆んどだったことだろう。また、困ったら役場へという意識が強く、他人にお願いすることを美德としない日本的?な考え方が大多数であった。実際、日野町内から住民の支援要請の多くは、当初、町役場に寄せられていた。

震災から1年が経過したいま、日野町にはボランティアネットワーク組織も生まれ、住民意識も変化していると聞いた。確かにこの震災は人的・経済的に大きな被害を与えた。しかしながら、そこから新たな「大切なもの」が生まれてきているのは事実である。公的サービスだけでは、緊急時には住民生活を守りきることができないし、非公的サービスだけでも同じことである。

われわれが住み慣れた町で生活をするためには、ボランティアや社会制度などの社会的資源の活用が不可欠であり、それらをつなぎ合わせる連絡調整者がいてこそ機能するということが証明されたといえよう。これからの日野町の住民活動の展開に大いに期待する。

みそ汁づくりを通して (下菅 恩田記子)

あの日は「全国介護保険サミット」で米子のコンベンションセンターにいた。ものすごい揺れだった。午後5時過ぎに家に帰ってみると、息子夫婦の新居建設中の足場が崩れて、今にも道に倒れそうになっていた。母屋の方は大黒柱のところの大きな梁が外れ、家中の戸という戸が動かない。公民館にしてみると、皆さんが炊き出しをされていた。老人福祉センターでは、顔なじみの人ばかり、私はホッとした。翌日からはいろいろな所のボランティアさんが来て、後片付けやシート張りなど、立ち上がりへのケアを含めてやってくださった。このことは、私たちがお返しすることができないくらい、たくさんの人達の心をいただいたと感謝している。10月15日、町に買いものに行った帰り、老人センターに立ち寄って、大きな声で「みんな元気? なにか私にできることない?」と声をかけた。すると、「一日一杯のみそ汁が食べたい」と声がかかった。次の日から13日間、自分の家にある材料のみそ汁を作った。ときには、「山の茸の汁が食べたいなあ」と希望があり、山で茸を取りながら、ふと下を見ると、大きな地割れがあり足が震えた。

10月28日、JA日野町支部女性会の役員会があり、朝市グループの野菜や、加工グループの味噌をいただいて、その後23日間の汁をつくることができた。女性会会員の善意の心がこもった「み



ボランティアによるブルーシート張り



ボランティアがみそ汁を

そ汁]ができて、どんなにか皆さんの元気の支えになったことかと感謝している。

町内の誰もが大小の差こそあれ、被害を受けているなかで、善意には善意の心が返ってくるということを実感した。だからこそ私は、11月13日最後の避難者が仮設住宅に入居されるまでみそ汁作りを続けることができたのだと思う。いまでは、私なりに立ち上がりへのお手伝いのできたことに喜びを感じている。

過疎の町でのボランティア (ボランティア 井上厚史 浜田市)

10月8日の午後、島根県浜田市を出発し、浜田道—中国道—米子道を経由して日野町文化センターへ。そして、黒坂小学校の体育館に到着したときはもうすっかり闇の中だった。途中で目にした地割れや家屋の損壊は、阪神・淡路大震災の再現かと思われたが、体育館周辺の家屋にはそれほど大きな損壊は見られず、「震度は大きかったものの、被害はそれほどでもなさそうだ」と安堵して毛布にくるまった。しかし、翌朝から雨の中で始まった瓦レキの撤去作業をするうちに、神戸のときは事情が違うことを思い知らされた。家の中をのぞき込んで、「なにかお手伝いすることはありませんか」と尋ねても、「あとで自分でしますから大丈夫です」というお年寄りの返事ばかり。見渡せば、家の中はタンスや食器棚が倒れ、何もかもが部屋中に散乱しているというのに……。そのときはじめて日野町が過疎と高齢化に悩む町であり、リーダーシップを取れる若者がほとんどいないということに気がついた。「この町の復興は大変な難事業になりそうだ…」というのが当時の私の率直な感想である。

あれから一年、町内の方々の懸命な努力や町外ボランティアの献身的な協力により、町はしだいに元気を取り戻しつつある。しかし、神戸のときも、震災から一年以上が経過して、孤独死やふさぎこみ、閉じこもりが次々と表面化するようになった。高齢者が高齢者を支えている日野町の場合、住民の方々の負担はこれからも増えこそすれ、減ることはないだろう。どうすれば心の不安を取り除き、元気と自信を持って日野町に住み続けることができるのか、その答えを『日野ボランティア・ネットワーク』の活動を通して見守っていきたい。お年寄りの口から、「またいつでも遊びにきないよ」という声を聞けたとき、はじめて日野の災害復興が完了するのだと思っている。

ともに助けあった仮設住宅 (黒坂 恩田孝雄)

我われは、大地震で家が倒壊した者同士、互いに受けた物的・心的被害という共通点を持ちながら、黒坂小学校グラウンド隅の仮設住宅で、支え合いの生活が始まった。その中で、おのずと自治組織が形成され、何となくその代表者になっていた。

はじめは、町からの配布物などのお世話をするだけだと気安く思っていた。しかし、日々の生活の中で、互いにいろいろな申し合わせ事項等をつくる必要も出てきた。このようにして即席的な集団ではあるが、互いに助け合いながら生活していった。あるとき、各家の屋根で漏水が発生した。この修繕のために役場との交渉をしていく中で、お互いの気持ちがひとつに結びついていったような気がする。連帯意識や仲間意識が盛りあがる一方で、自宅の復興態勢を整えるために誰もが忙しくなってきたのである。

今年の4月に入ると、伊達さんが新築を終えて、仮設住宅から出て行かれた。さらには、6月に山形さん、8月には長尾登美子さん、9月には長尾君子さんと矢田川さんが去っていかれた。それぞれ自分の家の修復や新築が終わったことは、とても喜ばしいことではあるが、何箇月か共に過ごしたもの同士として寂しさが募る昨今である。誰からともなく、「お別れ会」をしようということになり、9月9日に実施した。全員楽しく、夜の更けるのも忘れて大いに盛り上がり、有意義な集いとなった。そのなかで、一年後には、全員もう一度出会う会を持とうということになった。

ともに苦しみを乗り越えて、これからも心がひとつに結びついていくことを願いながら、互いに復興と自宅が完成した喜びの涙をかみしめ合った「お別れ会」となりました。

地震とお寺の復興と人の心 (泉龍寺住職 三島道秀)

「和尚さん、わが家の石塔はいつ直るでしょうか。」と、この平成13年のお盆前にはよく尋ねられました。

石材店の顧客は、鳥取県西部全域にわたり、修理の順番が回ってくるまでにたいへんな時間がかかり、この対応に苦慮していると聞くと、あまり無理も言えず、未修理の皆さんには、石材店に代わって謝っていました。

平成13年9月1日現在、各石材店、ボランティアの方々の献身的努力により、境内地内の墓地・石塔は、約90パーセントの修理が終わっています。しかし、「お寺の歴代ご住職の石塔がまだ直っていないのなら、もう少し我慢します。」と伝えてくださり、静かに順番を待っていらっしゃいます。現実には、本堂・庫裏・位牌堂等の建物の屋根、壁や崖崩れの修復等に多額の費用がかかります。しかし、基盤である檀家様各家の被害が甚大なため、ご寄付を募り、各場所の復旧作業に取りかかるのを1年間保留とさせていただきました。明年には、各役員の方々と復興計画を起案してゆきたいと思っています。

地震発生直後から、多くの方に「がんばってください。」と励ましをいただきました。そのときは確かにうれしかったのですが、数日たって、心身ともに疲れてくると、「がんばってください。」と言われるたびに、「これだけがんばっているのに、これ以上何をがんばれと言うのだ。」と思うこともありました。しかし、ある方が、「ともにがんばりましょうね。」と声をかけてくださったとき、こみ上げてくるものを感じたのです。ご位牌の無事を見に来られた方々の多くが他人には言えない疲労やつらさを心身に持っておられます。私から前記のことをお話すると、堰を切ったようにご自分の思いを打ち明けられます。人間どこかでつらい



応急仮設住宅（黒坂団地）入居者による「お別れ会」

思いを聞いてほしいのだ、とあらためて感じる瞬間でした。人の心の原点、『自分を認めてほしい、理解してほしい、わかってほしい』。これを満たす場所がお寺にはあると思うのです。

このたびの大地震により、家も人の心も多くの被害を受けたのですが、今後、つねに心のより所となるようなお寺をめざし、復興に努力してゆきたいと思っています。

待ち遠しい県道の復旧 （久住 吉原敏治）

鳥取県西部地震により、日野町全域で甚大な被害を受けました。そんな中で、通勤路として利用していた県道菅沢日野線も斜面崩壊等により全面通行止めとなりました。迂回路として、菅沢ダムのまわりを通り、職場である日野町役場に通勤しております。

地震直後なかなか家に帰ることができませんでしたが、ようやく家に帰ってみると大変でした。家の中はめちゃめちゃに物が倒れて落ちていて、足の踏み場もありませんでした。幸い屋根は大丈夫でしたので安心しました。役場への通勤時間は、これまでの倍の約40分くらいかかります。でも、片側通行規制によりその時間も一定ではありません。また、朝は信号機がなかったのに、夜には設置してあるといった具合に、状況が日々変わっていきました。子どもたちの通学は、私の車で公民館まで送っていき、そこから学校まで歩いていくという毎日になりました。仕事の関係上、夜遅くなることが多くなり、また、雪が降ると菅沢ダム周辺の道路は初めてでもあり不安でしたので、昨年12月から今年3月まで4か月間、黒坂で間借生活をしました。現在は久住の自宅から通っています。

中学生と小学生の3人は、始業と終業時刻が違ってきますので、それに合わせて送迎することが難しく、翌日の送迎時刻と分担を毎晩相談して決めることに苦勞しました。いつまでこんな状態が続くのか不安でしたが、先日、県道の復旧工事の説明会が開かれ、調査・工法検討に時間を要するものの、平成15年3月には開通する予定であることを聞き、安心しました。しかし、まだ1年もの間、いまの繰り返しです。できる限り早く開通していただき、通勤・通学に便利な県道の復旧をお願いします。

ボランティアを受ける立場になって (黒坂 坂出清子)

当初、「解体すべきか、それとも修理すべきか」、築百数十年という家の歴史の重みなのでしょうか。何となく心に引っかかるものがあったて決めかねていました。役場から確認の電話があり、また迷いが出てしまいました。建築の専門家や息子ともたびたび相談して、結局、修理することに踏ん切りをつけました。隣家が解体されて空き地になっていたのので、その土地を借りて倉庫を建て、家財を全部引っ越したあと、重機で傾きを直し、各部屋の柱に支えを入れ、再び傾かないようにしたうえで冬越しをしました。

3月20日過ぎにやっと本格的な着工となりました。さすがに大黒柱はしゃんとしていましたが、壁土を全部落とし柱だけになると、下の部分はかなりボロボロ。悪い柱は取替えたり添え柱をして、部屋の仕切りは4枚の襖を2枚に減して柱を立てました。壁にはかすがいで補強を入れ、工事は着々と進行しました。ようやく「これなら大丈夫かな」と思えるようになりました。仕上げはボードとクロスだけで、見た目には以前と変わらぬ姿に完成しました。いよいよ隣からの引越しです。たいへんなことです。そんなときボランティアセンターから、「お手伝いを頼まれたら？」と声をかけていただきました。初回は県の職員さん3人と、地震以降ずっとお世話くださっている渡辺さんの4人。てなれた渡辺さんの指示で、次々と荷物が家に運ばれて、各部屋は満杯となりました。2回目は、学校の先生2人と渡辺さんの3人で、あらかた運んでいただきました。今までボランティアをすることはあっても、受ける立場になったことがなく、今回はじめて皆さんのご厚意に助けをいただきました、この上ない有難さを知りました。

下の部屋はなんとか生活できるようになりましたが、2階は越したときのままで未だに片付けておりませんが、木造のすすけた天井に風格と愛着を強く感じながら、満足した思いで生活している今日この頃です。

温かい心をいただいて (根雨 遠藤基一)

私は、平成12年10月6日、この日を生涯忘れることはできません。鳥取県西部地震で住宅が「全壊」と判定され、危険の赤札が貼られ、やむなく全面解体に至りました。相次ぐ余震のなか、慌しく家財を整理してたくさんの物を思い出とともに捨てました。11月1日からいよいよ解体開始。大きな重機がアームの先の鉄バサミで大屋根をくわえて下へ押しつけると、ものすごい破壊音で家が泣きました。私も心の中で泣きました。しかし、震災直後からお手紙やお電話での数々のお見舞いや励ましは本当にありがたく、ともすれば落ち込みがちな気持ちを奮い立たせてくださいました。地震の翌日から片付けに駆けつけてくださったたくさんの友達、ボランティアさん。「うちの借家に入らないか」と言ってくださった近くの友人や、「わたしの実家が空いているから、家財を入れたら」と言ってくれた小学校の同窓生。また、家の再建は不可能だと思われたとき、鳥取県の片山知事さんの「住宅再建には300万円を助成する」とのご英断にはたいへん勇気づけられました。ともすれば弱気になりそうな私を支えてくれた家内や、たくさんの温かいお心のおかげで、平成13年7月、家が完成し入居できました。このときにも、ボランティアの皆さんにたいへんお世話になりました。

新しい家に移って間がないので、木の香り、畳の匂いなどは初々しいけれど、何となくよそよそしいのは、まだ暮らしの手垢がついていないからでしょう。

数多くの方々からいただいた温かいお心を、これからは僅かずつでも社会や地域の皆様にお返ししていかなければ・・・と話合っているところでございます。

震おさまれど、災おさまらず…しかし (神戸元気村 吉村誠司)

ニューヨークで崩壊したビルのガレキを見た時、阪神大震災直後の神戸のあの日を思い出した。同じように人が造ったものが、無情にも崩れている。人間は3～4日以内に助けないと、命が危ない。私が東京から神戸に向かい、焼け野原に立ったのが4日目の夜中だった。ほとんどすべてがガレキと黒こげの街。倒壊した建物には生命は無かった。「その時」に間に合わなかった後悔の思いが込み上げてきた。燃え尽きるまで焼けた火事の匂いが鼻の奥に記憶として残った。長田区では、死者の三人に一人は焼け野で遺骨となっていた。そして、その中から逃げ出して来た人との出会い、語り合い、神戸に残って支援を続けよう、そうしないと自分に嘘になる。次の災害では、この失敗を繰り返さないようにすることが、かけがえのない数千人の生命から学んだことだった。この思いが、私を鳥取県に運んだ。まさに今、「動くとき」だった。そして、あれから1年の月日が流れた。あの震災の揺れを体験した人は、毎日が、様々なあの日の記憶との戦いだと思う。台風が来て、風で家が揺れるだけでも、「ドキッ」とする体験は身体に染み付いて忘れない。「震おさまれど、災おさまらず」という言葉を私は時々使う。建物は直っても、義援金をいただいても、心の傷は癒えることはない。

7年目の神戸でも、昨日のように震災を覚えている人が多い。困ったり、不安になった時に話せる人や団体があればありがたい。日野町では、そんな人間関係があった。そこには、深い人の絆が、あれほどの災害を乗り越え、被害を最小限にしていたことに気づいた。それは、神戸市長田区での人々の動きと似ていた。顔と名前を知っているという関係が安否確認を早め、火が迫り来る前に、少しでも助け合うことができた。最初の「ボランティア」がここにもいた。これは、仕事でもお金でもない、国境を越えた自然に動ける原点の「人助け」の世界だ。震災直後、自治会や近隣の方々、徹夜続きの役場や消防団の方々は、誰も自分たちがその「ボランティア」とは言わないだろう。県外から駆けつけた多くの人々が、その「エネルギーを助ける心」に出会った。文面に出てこない、当たり前前に動いていた多くの人達に大きな拍手を送りたい。そして、地球が教えてくれたことをつないでいこう！



いち早くかけつけボランティア活動に当たる神戸元気村の皆さん(下樓地区で)

三区がわらばん

NO.141
12.12.30
編集長 遠藤基一
発行者 根崎三郎
根崎三郎自治会長 池原和夫

そのとき、あなたは

三区住民アンケート

平成17年10月6日午後7時30分、鳥取県西部地方を大地震が襲いました。震度6強、マグニチュード7.3は阪神淡路大震災を上回るものでした。

しかし辛いなことに昼過ぎという時間帯で死者ゼロ、火災の発生もありませんでした。震源とされる日野町では、家屋の全壊や半壊などの被害が続出し、水道の断水や鉄道・道路の不通などとライフラインに多大の被害を受けました。

今回「三区がわらばん」ではそのとき、あなたはどのようにアンケートを行ないたいかから回答を得ました。おたずねしたのは①地震の時にどこに居られましたか ②その時の状況について ③「あの地震だ」といふように感じられましたか ④震災後の町政にのぞむこと 以上四点です。

このアンケートが今後何らかの形で生かされれば、幸甚に思うものです。(順序不同)

五十五才代 女性

①家 ②ゆれが激しく、動く事が出来なかつた。外に出て、近所の方と一緒にいた ③布団をかぶっていた ④日野町がなくなってしまうのではないかと心配

七十五才代 女性

①家 ②ゆれがひどく、動く事が出来なかつた。じっとしていた ③その場にすわりこんでいた ④いまままで通りの日野町にもどってほしい。

五十五才代 男性

①家の車庫に居ました ②一瞬、北朝鮮のテポドンが落ちて来たかと思つた。最初の不気味な「ゴ」と言つた音は、何とも言えない音でした。もちろんだつていられたんですけど、これだけの揺れだったので震源地は、このすぐそばに被震地だろうと考えたのです。さすがに日野町が震源地には、町の皆様には連日連夜たいへんご苦勞さまでした。日野町の人口が少なくならない様に、いろいろな方面



運良く孫は目が覚めず孫の上にかぶさる様にして、暫くして周囲の上を見ました。(タンスの上など)地震がよくあるので、いつも孫をさせる

とき、部屋を中心に、物が落ちてくるとどかない位置に寝かせていました。防災無線にて「火の元栓を止める様に放送があり、立って炊事場に向きました。食器その他がすでに散乱し、用心しながら止めました。④神戸震災後であり、町の対応も早く、無線での放送がどんなにか力強かつ

より助成して下さい。
六十才代 女性

①自宅居間 ②孫(二才)は隣室で昼寝をしていた。私は昼食の後片付を仕舞い、ホッと一息、机に向つて新聞を開き、静かな一時を過ごつてしていた ③いつかの地震とはゆれ方が大きいなと思ひ、すぐ隣の孫の所へ行かなければ、と立ち上ろうとしましたが、横ゆれがひどく立てられないので、四つん這いにて隣室へ

たか知れませぬ。私火の元の放送でハッ!!と気づいたことでした。過疎の小さい町のことですから、とて毛町政だけにたよれないので、県・国をあけて対応して欲しいと思ひます。又住民は町内一つ家族という意識をもつて、お互い協力し合う事の大切さをより強く感じた出来事でした。

四十才代 女性

①台所 ②なし ③テーブルの下にもぐりこんだ。しばらくしてからがスの元栓をしめた ④震災により税金が上がるのではないかと不安です。

三十五才代 女性

①自分の部屋(休憩中) ②パソコンを置いて、最初は「あ、地震だ」という感じから「どうしよう、どうしよう」とパニック状態におち入り、頭の中真っ白という感じになった。とりあえず外に出ると近所の人ほどんぼが外に出ていて、大変なことになったなと思つた ③パソコン中だったので、パソコンを押えて、ゆれが治った時点で外へ出た(何を持って出ると考える余裕などなかった) ④弱者の味方になつてほしい。皆が安心して生活していけるようバックアップしてほしい。

五十五才代 男性

①歯医者 ②医院の窓があいていたので、坂本理髪店の建物が大きくゆれていたのがよく分つた。ゆれが中々おさまらないので、普通ではな

二十才代 女性

いと思つたが、まさかあれが大地震とは思わなかつた。歯医者から出て家の方を見た時、ケムリが出ていて異様な雰囲気だった。⑤何も出来な

(二ページへつづく)

おまげ

「立ち上がれ日野町」
二〇〇一年は復興元年だ、
悲しみの中にも喜びは有る、
10月6日の大地震お見舞い申し上げます。▼先般、奥西の知人との話。神戸も震災から五年もたち、確かに建物は復興できたが、肉親や友達近所の人を亡くした悲しみは一生消えない。さういえば、5年前の神戸にボランティアで出勤した時、玄關に花とお供物が有つたの思い出した▼さうだ。確かに日野町は建物、道路等多くの物的被害を受けたが、死者ゼロは正にギョギョだ、有難いことだ。悲しみの中にも喜べる点は多くある。喜べる点を数多く見出し、元氣を出そう。私自身も、今年は日野中PTAの会長を勤めさせて頂いているが、生徒が競争であったことが何よりもうれしい▼また自衛隊、消防団、数多くのボランティアのみなさんをはじめ、全国から多くの真実を頂戴した日野町▼二〇〇一年は復興元年だ。新世紀二一世紀だ。町民一人一人、今何ができるか、何をなすべきかよく考え、「ふしから芽が出る」如く、「一日も早い心の復興をなし、立ち上がる」を志す。ところが全国から寄せられた真実に対する恩がえしだ▼泣いてたまるか、(火水風)